

農村女性が提起する新たな価値と協同の原点

寄稿

長野大学 産業社会学部
助教授 田中 夏子

信州に着任以来、農村における女性の仕事起こしやグループ活動を勉強させてもらっている。最初は、「自分はこれまで、どうして農業や農村と、こんなに無縁な生活をしてきてしまったのだろうか？」という疑問が発端だった。東京を暮らした仕事のこととしてきたことに第一に原因があるの言うまでもないが、それにしても、多くの都市生活者が、そこに暮らしの拠点を置いていたというだけで、農業・農村が、生産、文化、教育、環境など、あらゆる面にわたって、実に多くの価値をもたらしてくれている事実を知り得ないとすれば、なんとという大きな社会的損失だろう、と愕然とした記憶がある。以降、まずは一人で、それから学生たちを伴って、農家におじゃまをし、お話をうかがいながら、農作業のお手伝いをさせていただくようになった。

その過程で、様々な活動や仕事起こしに取り組む、農村の女性たちとおつきあいの機会に恵まれた。彼女たちが持つ力強さ、忍耐強さ、そして何よりも発想の豊かさ



実行力に圧倒され、この不思議な力の源泉は何だろう?と考えるながら、おつきあいを重ねるうちに、その独特の「流儀」に多くのことを学ばせてもらった。

彼女たちの事業や活動のきっかけは様々な。農業改良普及所や農協の生活指導員の尽力でスタートしたもの、あるいは行政や農協とは明らかに一線を画して、独自に発

足したものの…。事業内容も多岐に渡る。安心・安全を最重視した農産品づくりや工夫を凝らしたその加工品化、消費者と生産者が膝つきあわせるようにして育てた共同購入、伝統的な結び組織を文化や福祉に応用しながら豊かな人間関係を模索する活動等。

こうした活動現場を訪ねるうちに、いくつか示唆的な特徴を感じるようになった。第一に、すべてが地域と生活に密着した事業であること。ある人は、「この地域で豊かに老いることができるために、今、何が必要か」を原点に事業を構想したという。第二に、素性の知れたプロセスへのこだわりと、そのための徹底した情報公開。ある人

は「一度添加物を使うと、坂道を転げ落ちるように化学物質にまみれていく」と指摘した。第三に、お互いの健康や暮らしの事情に配慮した仕事の構成。女性の場合、家族構成やその健康状態によって、仕事へのコミットが規定されがちだ。そのことをよく知る者どうしだからこそ、多様な働き方に対する尊重が生まれる。第四に小規模ながら、手堅い経営。地域の小売り店をはじめ、地元の学校、病院などを中心に、地産地消型のモノの流れを形成する。ある人は「私たちの製品、食べたらこの村に来て」と、村外のスーパーからの引き合いには応じなかった。第五に、行政や農協と、女性との、これまでの垂直的な関係に風穴を開けようとする志向。そして第六に、試行錯誤を厭わない、イノヴェイティブ(革新的)な体質であること。一つのニーズをつきつめると、必ず新しいニーズが見えてくる。乳製品の加工を担う人々は、足元から一つひとつ工夫を重ねるうちに、複雑な加工機械の配管や修繕も、今や、台所仕事の延長線のようなもの、だと笑った。

地域の暮らしと、小さな単位での仕事を大事にする、こうした事業活動には、協同の原点ともいえるべき経験がみなみと蓄積されている。協同の再生は、むしろ組織の外にあって、私たちの暮らしと仕事の必然の中から、着実にその存在意義を訴えている。